

【特別・嘱託・協同研究員の研究】

【要旨】 イェシェー・ペルデン著
『モンゴル仏教史・宝の数珠』
チベット・モンゴル語対照訳注 (2)

伴 真 一 朗

本訳注は、三宅伸一郎、松川節、伴真一郎「イェシェー・ペルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』チベット・モンゴル語対照訳注 (1)」の続きである。(2)ではチベット語の7a5、モンゴル語の6v5まで訳注を行った。主にチングスの諸弟・諸子について述べられた部分である。

(1)の序文の繰り返しになるが、『モンゴル仏教史・宝の数珠』の概要を述べる。ケンチェン・パンディタ=イェシェー・ペルデン (mKhan chen paṅḍi ta Ye shes dpal ldan) により1835年に著されたが、チベット語版とモンゴル語版の2つが存在している。この中でモンゴル語版は既に1961年に公開されている (Walther Heissig, *Erdeni-Yin Erike: Mongolische Chronik der Lamaistischen Klosterbauten der Mongolei von Isibaldan (1835). Monumenta linguarum Asiae maioris, Series nova, Bd.2, Kopenhagen: Ejnar Munksgaard, 1961*)。チベット語版については中国語訳があるが (蘇魯格訳注『蒙古政教史』北京、民族出版社、1989年)、その原文に関しては、寺本婉雅将来、宗林寺 (富山県城端) 所蔵の木版本の影印と活字本が、2019年に真宗総合研究所・西藏文献研究班によって公刊されたのが最初である (松川節、伴真一郎、ア Rilディー・ボルマー、更蔵切主、三宅伸一郎 (共編) 『イェシェー・ペルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』: 寺本婉雅旧蔵』大谷大学真宗総合研究所・西藏文献研究班、2019)。これを底本として和訳と注釈を行ったのが本訳注である。

訳注作業は、チベット学のみならず、トルコ・モンゴル語学の欧語圏の業績を参照して行った。これは他の漢訳やモンゴル語校定注には無い本訳注の特徴である。中でもチングスの諸子諸弟の人名の語源に関しては長い研究の蓄積があり、本訳注においては、ペリオ、デルファーといった古典的業績、及びリバツキによ

る近年の人名研究に依拠して解説した。

なお、人名研究は諸文献の異なる綴りを収集する必要があるが、本書のモンゴル語版には、従来の研究が収録していなかった綴字表記が見られることを指摘した(注25、ベルグテイ)。さらには、モンゴル人名のチベット語表記について、従来の研究においては検討されていない問題点が少なくない。本訳中ではチベット語諸文献中の綴りの異同、モンゴル語発音がチベット語表記にどの程度反映されているかという問題について検討した。そして時代に伴うモンゴル語の発音の変化が、チベット語の表記にも影響を与えている可能性について指摘した(注31、オゴタイ)

今回訳注を行った範囲では、『モンゴル仏教史・宝の数珠』が参照した文献について述べられている。本書はチベット語史料『パクサムジョンサン』から多くの記述を引用しているが、『パクサムジョンサン』が中国・モンゴル双方の文献を参照した事を明記しているのに対し、本書ではモンゴル文献のみを信頼できる史料としてあげた箇所がある。これについては訳注で、本書の撰者イェシェー・ペルデン独自の見解の可能性があると指摘した(注9)。モンゴルの王統についてはモンゴル文献の他にサキャ派の古い文献をも参照したという記述もあるが、これは『王統明示鏡』だと考えられる(注11)

また、チベット文とモンゴル文を比較対照した結果、両者の意味が対応していない箇所も見られた。例えば、モンゴル語で程度を表す形容詞の部分がチベット語には無い(注8、チベット語 *btsun* / モンゴル語 *ariyuqan*)、チベット語で選択疑問を表す助動詞が、モンゴル語では譲歩になっている(注14、チベット語 *-dam* / モンゴル語 *-baču*)、である。これは翻訳の問題とも考えられるが、あるいはチベット文・モンゴル文が別々に作成された可能性を示すことができるかも知れない。両言語版の関係については引き続き検討したい。

* 本稿は2022年度指定研究西蔵文献研究の研究成果の要旨である。

本文は、大谷大学学術情報リポジトリ (<https://otani.repo.nii.ac.jp>) を参照。

真宗総合研究所研究紀要、第40号、pp.175-198。